
鎮魂少女ナナ

葉月 優奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂少女ナナ

【Nコード】

N9389U

【作者名】

葉月 優奈

【あらすじ】

魂の声は、聞こえますか？

鳳凰院 菜々は、鎮魂の家柄の娘。

彼女には双子の妹、夜耶がいる。彼女も同じように、鎮魂の家柄の娘。

鳳凰院家は、代々長男は『僧侶』、長女は『尼御前』になる長い歴

史がある。

『僧侶』や『尼御前』を代々一人が受け継いで、その血を維持してきた。

その前に、『鎮魂』の修行を積むことになる。

つまり二人は、鎮魂をする少女として『鎮魂少女』。

『戒壇の日』、その日は『尼御前』を決める日。

『鎮魂少女』が、大人の『尼御前』に成長する日。

菜々と夜耶は、その日を目指して『鎮魂』をしていく。

『鎮魂』とは、死んだ人の魂の声を聞くこと。

今、菜々と夜耶は家庭科室で、死んだ人の話を聞きに来ていた。
彼女の声を、聞くために……

秋のある日、私は高校の校舎で恐怖の対象となるモノと向き合っていた。

夕日が落ちて、薄暗い学校の家庭科室。

あたしは、キッチンを向いて耳に小さな電話を耳に当てていた。

あたしの名は、鳳凰院 菜々。都立葛芝高校の二年生よ。

今の時間は放課後で、部活動のない生徒は、帰っている時間帯。

藍色のブレザーのあたしは、サイドポニーで派手なピンクのリボン、やや目が釣り合って、ピンクの携帯電話に耳を開けていた。

ここは、高校の家庭科室。コンロの上には、しゃがんだ女の子が見えた。

ロングヘアーの女の子は、全く実体がない。この学校ではないほかの学校のブレザーを着ていて、嘆いた顔を見せていた。

「私は、今でも間違っていない、そう思うの」

動かない口だけど、あたしが持っている携帯電話から逼迫した彼女の声がしていた。でも、彼女は生きていない。死んでいるの。

彼女は魂が、具現化した『魂体』と呼ばれるもの。

現世にあるモノに取りついて、存在している、あるはずのない幽霊。

それが、死んだ人から抜け出して、魂に近い人を作り出すの。

苦々しい顔で、あたしはこの魂体の少女と向き合っていた。

あたしの隣には、ショートカットで同じブレザーの少女がいた。

同じく携帯電話に耳を当てて、難しい顔を見せていた。

彼女の名は、鳳凰院 夜耶。彼女はあたしの双子の妹よ。

彼女も、あたしと同じく魂体の少女の声が聞こえる。

「ああつ、一度でいいから自分の子供を抱きたかった」
その少女は、コンロの上で胸を抱えて泣き出しそんな顔を見せていた。

隣の夜耶は、何か言いたそうな顔を見せていた。

それでも少女の嘆く声は、ずっと携帯電話から続く。

「私の子供、あの子には本当は私が必要なのよ。そう思うでしょ」
魂体は、体をあたしたちの方に向けていた。

しゃがんだ少女は、何かを訴えかけるようにあたしたちを向いている。

でも、そこからは声がしない。携帯電話から、代わりに声が聞こえてくる。

あたしは、相槌だけをうつて彼女の話をも黙って聞いていた。

その時、あたしの隣の夜耶は体を震わせていた。

前を向き、しっかりと魂体の少女と向き合う。

眉をひそめて、彼女がしっかりとむいた夜耶が口を開こうとした。

咄嗟にあたしは、携帯の通話口を抑えて隣の夜耶に、

「あたしたちの仕事は、違うわ。夜耶、ここは我慢して」

と言いはなつ。あたしの声を聞いて、うつむいた夜耶は、苦い顔を
して静かに頷いた。

「そうね」

夜耶の声の後、再び携帯電話から声が聞こえてくる。

「だから、私にはあの子がどうなったのか気になるの。」

あの子は、ちゃんと私と同じように愛情を注いでくれるのか」

あたしは、彼女の言葉に携帯電話で何度も「うん」とだけ相槌を打った。

喋らないけど感情を表す魂体の少女の顔が、どこか明るくなったように見えた。

でも、あたしは少しうつむいて彼女の想いを受け止めるだけ。

「私の判断は、間違っていないよね。」

ずっと若くして産もうとして、選んだ道。命を落としても、命を産むという選択」

「そうだね」

あたしの言葉に、コンロの上に座っていた霊体の少女に、微笑んであげた。

それは、温かくて安らかなもの。

どんな人間かわからないけど、きっとこの少女は優しいのだと思えたから。

だから、あたしはただ聞いていた。

「ありがとう、嬉しい。私は、正しかったんだ」

魂体の少女は、いつしか笑顔になっていた。

不安とか悲しみが、消えた安らかな笑み。

触れることはできないけど、弾んだ声が携帯電話から聞こえてきた。それでもあたしは、ずっと電話に耳を傾けていた。

夜耶も、落ち着いた顔でじっと聞き入っていた。

「それじゃあ、私はいくね。ありがとう……」

魂体の少女は、そういつてゆっくりとコンロの上から天井に上がっていく。

天に召される神々しさを、見せた魂体の少女。

あたしは、携帯を下ろして、夜耶に一言。

「夜耶、今よ。撮りなさい」

あたしの声に、夜耶は落ち着いた様子で携帯電話を魂体の少女に向けていた。

安らかな顔の天井に昇る魂体の少女に、携帯のカメラのシャッター音が聞こえた。

その魂体の少女は、天井をすり抜けてやがて見えなくなった。

あたしは、さっきまで魂体の少女がいたコンロを難しい顔で見ている。

すぐさまあたしはコンロの上を、物寂しげに見ていた。

「ありがとう、菜々ちゃん」

夜耶は、それでも浮かない顔であたしに声をかけてきた。

携帯画面を、あたしに向けて、疲れたような顔を見せていた。

「夜耶、終わったのね、だいぶたまったでしょ」

あたしも、携帯をポケットにしまって夜耶の持っている白い携帯の画面を覗き込む。

「今回の、子供を求める少女の霊で、十体。

もうすぐ、『戒壇かいだんの日』だし、これならいけます」

「ああ、これだけやれば間違いなく夜耶だね、うん」

あたしは、かわいい双子の妹、夜耶にいきなり抱きついた。

「それでいいの、夜耶」

すぐさまショートヘアの夜耶を撫でると、少し照れくさそうに頭をブルブル震わせた。

あたしと夜耶は、『鎮魂少女』。

それは、魂体を鎮める『尼御前』の候補生。

つまり、鎮魂少女が成長すると尼になるわけ。

人は、誰でも死んであの世に行く。

だけど、その死が納得できなかったり、ヒドイ死に方をしたり、強い後悔があつた死だと、モノに憑依ひょういして魂がこの現世に残ることがあるの。

それを世の中では分らないものの総称として『幽霊』と、一般的には言われているわ。だから、あたしたち『鎮魂少女』が存在して、魂体を鎮める。

鎮めないと、大変な災いをこの現世に起こしてしまうから。

「話を聞くだけって、大変ですね。なんか、こっちまで重くなっちゃいます」

夜耶が、いつも通り鎮魂の後には重苦しい顔で述べる感想。

あたしも、ため息をついて、彼女に同意した。

『尼御前』のような強い力を持たないあたたちの役目は、ただ『聞くこと』。

魂体を鎮めるには、いくつか方法があるけど、『鎮魂少女』のやるべきことは一つだけ。

ただ、魂体の話を聞くだけ。

おれで戦ったり、刀や錫杖で戦ったりしてするわけじゃないわ。

そして、あの世にまっすぐに送り届けるのが目的。

その役目は、辛くて必ず後悔が残る。

「あの父親、曰く『聞くことは、決して簡単でない』よ」

「うーん、重い話だからですね」

魂体の話は、重い話。

現世への恨みや、悔しさ、愚痴を延々と聞かされる。

逆に魂体が、明るい話をしてきても困るけどね。

そんな話をただ聞いてあげること、魂体はかつて生きていた人生の恨みや悔しさから解放されて、あの世へ旅立てるわけなの。

あたしは、家庭科室の椅子に座って夜耶の顔を見上げていた。

「夜耶は、『尼御前』を目指すのね」

「うん、この仕事は好き。」

何のとりえもない私が、みんなのために役に立っている、そんな気がするの」

夜耶は、この仕事に誇りを持っていた。高校生とは違う、魂を鎮める仕事が好き。

夜耶が、どうして鎮魂が好きかは知らないけど、それでもあたしは協力していた。

「夜耶は、本当に鎮魂が好きなのね」

「菜々ちゃんみたいに、いろんな性格があるわけじゃないから」

夜耶は、がっかりした顔でうつむいてしまう。

その時あたしは、家庭科室の方に向かってくる、一人の人間の顔を見つけた。

「あつ、夜耶、携帯隠して。墓真が来る！」

「えっ、あわわっ……」

静かな家庭科室で、夜耶は慌ててブレザーのポケットに携帯電話を突っ込んだ。

あたしの見える方角は、通路で墓真^{はかま}という男子教師が歩いていた。

年齢は四十代ほど、青ジャージの上下と四角い醤油顔の男。
いかにも九州男児っていう感じだけど、本当に九州男児だったりするのよ。

「全く、生徒指導の墓真は厳しいのよ。」

「携帯、見つけ次第、すぐ没収だもんね。これは特殊な携帯だし」

「そうよ、あたしたちは正義のスーパーヒロインだから！」

「それ、違うと思う」

苦笑いで、夜耶はあたしに同意していた。

あたしたちの持っている携帯は、見た目は普通だけど中身が違う。

墓真が、あの校則を作ってからあたしたちは随分苦労させられていたわ。

だからあたしたちは、墓真から逃げるようにこの場を離れることにしたの。

時間はすっかり暗くなって、北風が寒い今日。

コートを着たあたしと夜耶は、真っ直ぐ家に帰らず寄り道していた。いつも通り、駅前のファストフード店に来ていた。

二階の窓際の席に向き合って座ったあたしと夜耶の、いつもの帰宅ルート。

店内は、あたしたちのような学生たちでにぎわっていた。

「本当に墓真は、しつこいんだから。この間だってあたしのスカートをいきなり計ってきて、5ミリ短いつて、スカートの丈を直せってうるさいのよ。」

全く理不尽極まりないわ、墓真のヤツ」
口を尖らせてあたしは、墓真の文句をいつも通り愚痴る。

墓真 隆太。生徒指導の先生で、ほぼジャージ姿の割に、本職は体育会系日本史教師。

アイツがスーツを着ている姿を見たことないわ、だからいつも体育教師に見えてしまうの。そして問題のあの校則を作った、堅物教師よ。

ジュースを飲みながら、夜耶はあたしの愚痴を共感しながら聞いていた。

「うちの学校、携帯持っていたら没収だから、ちょっと厳しいよね」
「ほんとよ！墓真のやつ、奥さんに逃げられたから、あたしたち生徒に腹いせにやっているんじゃないの？」

などと、ジュースを飲み終え不機嫌な顔のあたし。

あたしと夜耶のいるテーブルには、二つの携帯を置いていた。

一つはスライド式の赤い携帯電話、これは普通の携帯電話。

大好きな食べ物、チーズのストラップをつけて、シールをいっぱい張って、きれいにデコレーションされていた。

そして、もう一つはピンクの折り畳み式の携帯電話。

こっちは、大嫌いな食べ物、ニンジンのストラップをつけている。

これが特殊な携帯電話、ウチの父親曰く『霊体電話』というの。

「『霊体電話』は、ただの携帯じゃないの。だから、仕事に使う道具よ。

なんで、こんな携帯の形をしているのよ、間違いやすいじゃないの」

「菜々ちゃんの携帯なら、間違えないと思う」

夜耶は、あたしのデコ携帯をじーっと見ていた。

『霊体電話』は、魂（魂体）と話すことができる携帯電話。

『鎮魂少女』にとつては、必須のアイテム。

これさえあれば、あなたも『鎮魂少女』になれるかも。

でも『霊体電話』では一般的に通話はできないし、メール機能もない。

ただカメラ機能だけはあって、写真にして画像データとして保存できるわ。

そのカメラ機能は、『尼御前』になるのに必要なもの。

『鎮魂少女』は、鎮魂した魂をカメラに撮ってあの日のために備えるの。

ちなみにこれを作ったのが、あたしと夜耶の父親よ。

小学五年生あたりからずっと、持たされているわ。

「でも、本当に都立葛芝高は多いね、霊体」

「そうよね、このエリアの『尼御前』はさぞかし大変ね。

葛芝高は、戦争の時は兵器工場の跡地だったとか。

で、空爆で破壊されたところらしいわ。

だから、ひどい死に方をした霊体が多いから」

「うん、日本各地の僧侶や、尼御前が集結して、葛芝高近辺で大規模鎮魂『鎮魂祭』みたましずめのまつりを行ったぐらいですからね。

大暴れする魂体や、鬼火、彼らのさまよえる魂を……」

夜耶が、顔を暗くして言う。なんか、怖いわ。

「まあ、そうね。このあたりは、魂体にとっては住みやすい条件がそろっているみたいだから。でも逆に現在は、その名残で近隣の学校から魂体が集まってくるけどね。

そのお墓が、一部ウチにもあるし」

「うん、そうだね。今は、その残党の魂体を鎮める役目があるんですよ」

思わず持っていたポテトを持ったまま立ち上がって、雄弁と夜耶は語っていた。

なんにでも真面目で、特に『鎮魂』に関しては彼女の想いもある。

誠実に話す夜耶、そんな夜耶にあたしは協力していた。

あたしには、目的が別にある。

だけど、夜耶に『尼御前』になることは互いのためでもあるの。

ちよっと恥ずかしそうな顔で椅子に座った夜耶は、持っていたポテトを口に入れた。

「そう、今は魂体だからいいけど、魂が暴走して『鬼火』になったら最悪よ。

それじゃなくても葛芝高は、大量に魂体候補がいるし、」

「でも、みんな死にたくて死んだんじゃないよね！」

夜耶の言葉に、あたしの顔も夜耶の顔も曇った。

鎮魂の目的は、しがらみのある現世から悩みを聞いて解決するとい

うもの。

だから、やることは一つしかない。

「魂体の話を、聞いてあげること。

現世に対してしがらみや未練がなくなるまで、徹底的に」

あたしと夜耶は、そう父親から教わった。」

「夜耶は、やる気があってよろしい。夜耶なら、立派な『尼御前』になれるって」

「そう、だよな……」

でも、まだ不安そうな顔を見せた、夜耶。

ジューズを飲みながら、あたしは双子の妹の顔をじっと見ていた。

「でも菜々ちゃんは、『戒壇の日』が過ぎたらどうなるの？」

「いいわね、夜耶」

そんなあたしと対照的に、夜耶の胸は大きい。

それを単純に、羨望のまなざしで見ていた。

「菜々ちゃん、なんで私の胸をずっと見ているの？」

「なんか理不尽」

あたしは、羨望と嫉妬の感情をこめて大きな夜耶の胸を見ていた。

携帯会社の最大手の頭文字Dの大きさはあるだろうその胸は、

あたしの胸の携帯会社第三位の会社の頭文字Aをはるかに凌駕する大きさ。

要は、うらやましいわ。必要なもの。

「何が理不尽なの？」

「ねえ、夜耶。何を食べたらそんなに大きくなるの？」

「な、なにがですか？」

「それよ」と、あたしは大きな夜耶の胸を指さした。

夜耶はちよつとだけ考えるしぐさを見せて、横目であたしを見てき

た。

「菜々ちゃんみたいに、好き嫌いないから」

などというと、あたしの頭に何かが刺さったような気がした。

「菜々ちゃんは、食べ物の好き嫌い激しいでしょ。」

ニンジンダメ、ピーマンダメ、牛乳ダメ、納豆ダメ、あれもダメ、これもダメ……」

「あー、もう、親みたいに言わないでよ！」

「でも、菜々ちゃんは大人になるまでに好き嫌い無くしないと、いけないよ」

「うつつ、夜耶様のおっしゃる通りです」

あたしは、胸をつままれる気持ちですつと夜耶の話を反省している顔で聞いていた。

「でも、菜々ちゃんは『鎮魂少女』にはならないの？」

夜耶は、真剣な顔でポテトを持ちながらあたしに聞いてきた。

「なんていうか、あたしに『鎮魂少女』は無理ね。」

地味だし、面白くないし、基本的に聞いているだけ。

それにあたしには……」

あたしはストローを抜き出して、マイクのように自分の口元に向けた。

「やりたいことがあるの」

あたしの言葉に、夜耶は優しい顔で、同意してくれた。

「やりたいこと？」

「そ、恋愛でしょ、部活でしょ、『鎮魂少女』ってできないこといっぱいあるからね。」

放課後は、基本的に青春をするものであって、鎮魂をするものじゃないわ。

そして、それ以上にもっとやりたいことがあるの」

「そっかあ、そうだよな。でも本当は違うよね」

夜耶の言葉に、あたしは薄ら笑みを浮かべていた。

「ねえ、このサイドポニーも、さりげなくシュシュ入れたりして、かわいいでしょ」

「あつ、菜々ちゃんは本当に華やかだね。かわいい」

「ありがと」の意味を込めて、軽くウインクしてみたあたしだった。

「夜耶も、おしゃれすれば。女の子は、誰でもかわいくなれる権利があるのよ」

「えっ、でも……まだ半人前の『鎮魂少女』だし……『尼御前』にも」

「そんなの関係ないわ、夜耶は素材がいいんだから。」

じゃあ、今度買い物にいこつ！『戒壇の日』が終わったら、夜耶のお祝いってことで」

少し暗い顔の夜耶は、明るい顔を見せていた。

自慢じゃないけど、夜耶はかわいいの。

あたしにはないものを、夜耶はいっぱい持っているわ。

例えば、と思いあたしはそばに置いてあるキーホルダーがいっぱい
ついたカバンを開けて、ノートを素早く取り出した。

「そこで夜耶様、明日の数学の宿題、見せてください！」

「菜々ちゃん、勉強しないと宿題の意味ないよ」

いつもながらに、真面目に返してくる夜耶。

「おねがいっ！あたしには夜耶しかないのっ。鎮魂も、手伝って
あげたんだし」

両手を合わせて、懇願したあたしのことを見かねた夜耶は、嬉しそ
うな顔を見せていた。

「いいよ、菜々ちゃん。じゃあ一時間千円で」

「うっつ、お金とるの？お姉ちゃんが、こんなに困っているのに」

「冗談よ、じゃあこれね」

そういいながら、素直に出してくれた夜耶のノート。

綺麗にまとめられて、色づかいが豊かな優等生夜耶のノート。

そう、夜耶はクラス一の秀才。本当なら、あたしのいる葛芝高じゃ
なくて、もっと偏差値の高い進学校に行けるから。

「ありがとう、さっすが我が妹」

あたしは双子の姉として妹に、かわいがるように抱きついた。

夜耶は、照れくさそうにあたしのことを受け止めてくれた。

そんな夜耶は、不意にあたしの背中にある窓を見て、ある言葉を口
にした。

「あつ、パパ」

夜耶の声に、あたしは夜耶に抱きついたまま夜耶の見ていた、ファ
ストフードの一階の歩道を見ていた。

そこにいたのが、町の歓楽街の裏路地に入ったウチの父親。

家がお寺だから、職業は和尚で、坊主頭の中年男性。ただ頭以外は和尚という雰囲気はなく、ラフな半そでシャツと、遊び人の中年男性にしか見えない。

それに、向かったのがさらに奥の薄暗い路地。

今頃は、お勤めの通夜の時間じゃない。

なんでこんなところにいるか、あたしは察しがついた。だから、立ち上がる。

手をぐつと握って、眉間にしわを寄せて。

「あ、あいつ！行くわよ、夜耶」

眉間にしわを寄せて、鞆を抱えたあたし。戸惑う夜耶。

「菜々ちゃん、どうしたの？」

「『鎮魂少女』出勤よ、夜耶！」

そっぴいながら、あたしは険しい顔でカバンを肩にかけてすでに走っていた。

ここは、きらびやかな繁華街にある裏路地。

そこもきらびやかだった、ちよつと怪しげなネオンが通りを彩る。

男の人が、客引きなんかをして、女の人はチラシを配っていた。

ファストフード店を駆け抜けたあたしは、路地のあるお店に入ろうとした、男の後ろにたどり着いた。

「見つけたわ！待ちなさい」

あたしが、声を発してその男を呼び止めた。

一瞬、あたしより大きな男の背中がビクつとして立ち止まっている。そんな、男の前にある店は『セイなる教会』と書かれた西洋風の教会のような張りぼての看板と、それは教会ぽくない女の子の写真やら、アニメ絵がいやらしい格好（要は裸）で堂々と大きく書かれていた。

てか、この店はなんなの？いかかわしい店ぐらいしかわからないけど。

ここは、いわば歓楽街。周りも風俗なんかがお店を立ち並んでいた。

あたしの後ろには、息を切らした夜耶がいた。

腕組みしてあたしが、一歩前に踏み出すと、恐る恐るその男は顔を振り返った。

険しい顔で、あたしはその男を睨みつけた。

頭は坊主だけど、たれ目で丸顔、やや濃いひげの中年男性の顔はあののいていた。

あたしの顔を見るなり、ウチのパパは顔色がみるみるうちに青くなっていく。

「げっ、菜々ツ！夜耶も」

「あら、お父様、どこに行かれますこと？ここは、お通夜会場じゃありませんわ」

いきなり礼儀正しい声で、あたしは父親にプレッシャーをかけた。あたしの言葉を察知してか、父親は一步下がる。けど、あたしは二歩、間合いを詰めた。

看板には可愛らしい女性の写真が、二万円という数字が書かれた場所。

近くには、看板持ちの女性も客引きをしていた、店の外観は楽しそうな

今頃はお通夜の家についている時間のはず。

職業が和尚だから、西洋風の教会なんか行くはずもない。

「その、つまり……これは精神統一の修行だ、うん。

「ここ、風俗ソープですね」

と、後ろの夜耶が思わず口にした。

あたしは、その言葉を聞いて「そう」とだけ漏らした。

「お経をあげる前に、風俗ソープで精神浄化は大事だ。

身も心もリフレッシュした状態で、あの世に送ることが、通夜という儀式だ。

だからこそ、俺もリフレッシュしてだな……精神浄化してお経をあげたほうが、死んだ魂も浮かばれるというもだぞ、うん」

そいういながら店に、納得して入ろうとする父親に、猛ダッシュで近づいたあたしが強引に手を引っ張った。

「あんたが、リフレッシュしてどうすんのよ、馬鹿！」

あきれ顔と、ため息をつきながら右手を引っ張り、店に足を踏み入れようとした父親を外に出した。

こう見えても、あたしは腕力だけはなぜか自信があった。なんか、

理不尽よ。

「菜々、や、やめろ！」

「さあ、あたしと今からお通夜会場に行きましょうね。

それとも、ここであなたをお通夜にしてあげましょうか？

あたしたちは、『鎮魂少女』だから」

あたしは、すぐさまあたしより大きい父親のシャツの首根っこを掴まえて、ずるずると引っ張っていった。

苦しそうな父親は、あたしの手を叩いてタップしてきたけど、無視してあたしは連れ帰る。夜耶は、それを見て苦笑いをするだけだった。

風俗店の看板から引き離された父親を、あたしはため息をつく。

「夜耶、行くわよ」

「う、うん…… パパに容赦ないね、菜々ちゃん」

「当然よ、このエロ親父！」と、笑顔を見せつつ、あたしは父親を引き連れて、路地から撤退させた。

翌日、あたしと夜耶は葛芝高の廊下を歩いていた。制服を着て、いつも通り放課後の学校。

放課後の学校は、人が帰って静かな雰囲気。

というか、今は体育館やグラウンドがむしろ熱い。

「この季節が来たかあ」

もうすぐインターハイだから、たまにすれ違う人もほとんどジャージを着ている。

部活のある部屋だけは人がいるし、文化部はインターハイの準備に追われるみたい。

それでも、あたしと夜耶は部活に入っていないから関係ないけど。

でも、人気のすくない学校を歩くには、この時期は好都合。

あたしと夜耶は『霊体電話』を握り締めて、学校を歩くのには理由があった。

「いないわね」

携帯電話ならぬ『霊体電話』は、全く反応しない。

魂体は、様々なモノにとりつく習性がある。

だから、『霊体電話』のスイッチを入れて、地道に歩き回って魂体を探すことが大事。

基本は、足で探して見つかったら『霊体電話』がバイブ反応するようになっていた。

最近は、反応も少なくなつて、このあたりの鎮魂が進んでいる証拠。あたしたちのいる音楽室そばの廊下で、吹奏楽部が練習している音が聞こえた。

おそらく、インターハイで演奏する練習をしているんだろう。

「菜々ちゃん、音楽室はこの前の幽霊騒動があつたね」

「うん、放っておくと『鬼火』になっちゃうからね」

あたしたちが行う鎮魂は、魂体が『鬼火』にならないような活動。

二人で何度も、『鬼火』を見てきた。

赤いその光は、幽霊の類とひとくくりにはできない。

それは、最も警戒し、恐れる事態、避けなければいけない事。

魂体が現世に未練を持って、同じ悩みを持つ人を取り込む。

魂体が進化した姿が、『鬼火』になる。

『鬼火』に取り込められると、二十四時間以内に取り出さなければ、生きている人は永遠に出ることができない。それはモノに、完全に閉じ込められてしまうから。

つまりは、一般社会の『神隠し』がこれに当たるわ。

あたしは、真顔で練習風景の廊下を歩いていた。

「それは、避けなければならない」

それは『鎮魂少女』としての存在意義にもなる、大事な事。

音楽室から、廊下を歩いて向かったのが隣の社会科室。

「当たった、かも」

すると、あたしの『霊体電話』が言葉に反応したのか、バイブ機能でブルブルって震えた。

それと同時に、夜耶の顔にも一気に緊張感が漂っていた。

夜耶も同じ『霊体電話』を持っているから、それがすぐにわかる。

あたしは、集中して周りを見ていた。廊下を歩くと、そこで見えたのが、

「あつた、あれね」

廊下越しに、社会科室の隣にある準備室が見えた。

その準備室には、窓越しから見えて武士の甲冑や、大きな地球儀が置かれていた。

社会に関係するものが置かれたその場所には、縄文式の土器も置かれていた。

土器のそばに、おぼろげな煙のようなものが見えた。

どうやら、あの魂体はまだこの土器に取り憑いて、それほど時間は経っていない様子。

「あ、あれだね」

「そうね、だけど……」

土器のあるその部屋には、人がいた。

部活では使用することはないけれど、日本史教師なので、あの男がいた。

「墓真が、いるわ」

難しそうな顔で眼鏡をかけて、机に向かう墓真の姿。

いつもながらに日本史教師らしからぬジャージ姿で、書き仕事をしていた。

生徒指導の墓真は、土器をちょうど背にして書き物をしていた。
(なんで、こんなところにいるのよっ！)と心の中で文句を言う。

「うーん、どうしよう」

「あの魂体は、あいつを取り込もうとしているようね」

魂体は、前とおなじように女の子の姿をしていた。

ポニーテールで、見た目は子供っぽい女の子は、墓真のことをじっと見ていた。

魂体は、普通の人には見えないし、気配もない。

霊感がなければ、感じることもできない。だから無害な存在。

でもあたしたち『鎮魂少女』は、人並み以上の霊感を持つから見る

こともできるし、感じることもできる。

「生徒指導の墓真に見つくと、まずいし。

いつそのこと、あいつを取りこんでもらったら楽じゃない」

「ダメよ！」

夜耶は、いつもながら真面目にあたしに否定した。

怒った顔の夜耶は、あたしに詰め寄ってきた。

眉間を寄せた夜耶の顔が、ちょっとかわいく見えるけど。

「でも、どうやるの？あいつに見つかったら、電話、取り上げられちゃうし」

「それは……そうだけど」

その一方で、魂体の女の子は興味を示したのかゆつくりと墓真の方に近づく。

半透明の煙のような存在に、靈感のない墓真は全く気づくことがない。

「じゃあ、どうするの？」

「私がやってみます」

そっぴいながら、夜耶は『霊体電話』を耳に当てて、鎮魂を、通話を開始した。

少し離れた廊下で、あたしは夜耶を眺めていた。

こういうところは、夜耶は変に強情なのよね。

前に出た夜耶に、少女からの悩みの言葉が続く。

あたしは、夜耶の少し後ろから墓真の動きを観察していた。

アイツに見つかったら、いくらなんでもまずいしね。

「どう？」

そんな女の子は土器から降りた霊、そのまま墓真を取り込んでいく。

どうやら土器の少女は、墓真を取り込もうとしているみたい。

「もうちょっと、電波が弱いかな」

社会科準備室の廊下で、夜耶が『霊体電話』片手に近づいていく。電波が悪いと、やはり声が聞こえない。

廊下であたしと、夜耶が社会科準備室のドアの方に電話片手に忍び足で近づくと、

「あれ、鳳凰院姉妹。なにをしているの？」

そこに声をかけてきたのが、あたしのクラス委員の笹森さん。

眼鏡っ子で、体の細く、夜耶には劣るが頭がいい落ち着いた顔の女子生徒。

クラス委員の腕章が、その証よ。

その声に気づいて、あたしは反応よく前にふさがり、夜耶はすぐさま携帯電話をブレザーに隠す。

「えっと、そのう、夜耶がね……」

「はい……菜々ちゃんと廊下探索です」

廊下探索って、何よ。夜耶の顔が、明らかに慌てている様子が見て取れた。

あたしの夜耶の咄嗟の言い訳に、笹森さんもやはり不思議な顔を見せていた。

そんなとき、社会科準備室の中の墓真が動き出した。

どうやらあたしの声に気づいたらしく、ゆっくりとドアに近づいてくる。

「まずい、墓真よ！じゃあ、いくわね、夜耶」
墓真に巻き込まれては、絶対困る。

だから、夜耶を引っ張って逃げようとした。

「ねえ、何してたの？夜耶さん」

笹森さんは、夜耶に対してしつこく追求してきた。

「あつ、笹森さん」

すると、廊下の奥には一人の男子が出てきた。

その男子生徒は、あたしというより笹森さんに対して、手を上げて
挨拶をしてきた。

「あつ、後藤君」

そっついながら、笹森さんはすぐさま男子生徒の方に駆け寄っていた。

あたしと夜耶は、そんな笹森さんを見送るなり夜耶の手を引っ張って、

「ほら、行くよ」

「うん、わかった」

煮え切らない夜耶は、ちらつと土器を見たときにそこから、

「どこに行くんだ？」

社会科準備室のドアが開いて、出てきたのが墓真。

いつも通りの強面が、明らかに威圧的な目で、あたしたちをじっと見ていた。

「なんだ？廊下でお前ら、何しているんだ？」

（相変わらず、不愛想なやつ）などと心の中で思いつつも、反射的

ににこやかな顔を見せたあたし。

「えっ、ただ通りかかっただけですよ」

「はい、そうです」

しかし、次の瞬間だった。

「そうなの、この話はあなたに聞いてほしい」

ありえもしない女の子の声が、はっきりと聞こえた。

それと同時に、墓真の奥にいる土器に取り憑いていた女の子が手をこつちに振った。

ざらざらと砂音にまぎれ、聞こえてくる声に、墓真の眉間にたちまちしわが寄った。

（夜耶、慌てて電源を切り忘れたわね）

と、後悔しても、もうごまかしがきかない。

そして隣の夜耶は、慌てた顔を見せていた。

「まさか、携帯電話？校内は、携帯は禁止だぞ、鳳凰院 奈々」

「えっ、なんであたし？」

なぜか墓真は、あたしの方ににらみを利かしてきた。

そういえば夜耶は優等生だから、携帯は持っているイメージが、ないモンね。

指をさした、ジャージの墓真はあたしに詰め寄る。あたしは、二歩退く。

あたしに集中していることで、夜耶はポケットの電話の電源をつまぐ切ったみたい。

「鳳凰院 奈々、ポケットを見せてもらうぞ」

「な、なんでよっ！」

もちろん、あたしも『霊体電話』を持っている。

さっきまで使っていた『霊体電話』もポケットの中に隠してある。だから、没収されるわけにはいかない。

手を伸ばしてきたジャージの墓真、あたしは身を隠そうとした。
苦い顔であたしは、咄嗟にあることを思い出した。

「ダメっ、セクハラ教師！」

「な、何を言い出すのだ、鳳凰院 菜々！」

一瞬だけひるんだ墓真の隙を、逃すわけにはいかない。
隣の不安そうな夜耶の手を、あたしは強引に引っ張った。

「逃げるわよ、夜耶！」

「えっ、あっ」などとうろたえるけど、あたしは脱兎のごとく墓真から走って逃げて行った。当然、墓真はあたしを追いかけてくる。
完全にあたしを狙っていることを知ったあたしは、廊下を疾走する。
そのまま、笹森さんたちのいる廊下の横をすり抜けた。

「ま、待て！鳳凰院 奈々！」

かくして墓真との追いかけっこが、始まった。

結局のところ、家に帰ればいいんだけど。

でも、魂体を見つけたまま、帰るわけにもいかない。

女の子の魂体が、誰か他の人を取り込まないとも限らない。

いや、むしろあの女の子は墓真を取り込もうとさえしていた。

なのに、なぜ。あたしたちは、『鎮魂少女』なのに。

などと自分の行いに齒がゆさを感じながらも、あたしは学校を走っていた。

放課後の学校は、夕日が傾き始めて少し眩しい。

夜耶とは、あの後二手に分かれたが、なぜかあたしを追いかけきた。

「待て、鳳凰院 菜々！」と、後ろから墓真の声が聞こえてくる。

あたしは、人気のない中庭を上履きのまま駆け抜けていた。

そのあたしを、追いかけたのがジャージ姿の墓真。

抜けた中庭、一階から二階の階段に上がる。

それでも、しつこく追いかけてくる墓真。

あたしも、追いつかれるわけにはいかない。

（しつこいわよっ！）

もう、何度心の中で叫んだらうか。

険しい顔であたしは、猛然とダッシュしていた。

人気のない廊下から、職員室の隣を素通りし、風の様に駆け抜ける。

「菜々、なにしてるの？」

と、職員室の廊下で小さい女の子があたしに声をかけてきた。

どう見ても小学生っぽいのが、だぶだぶのジャージ姿で両手を広げ

て近づいてきた。

笑顔で、一人で歩いてきた女の子は、手の出ない長いジャージの袖を振ってくる。

「桃、後で！」

そして、あたしはそんな小学生っぽい女の子の横を、駆け抜けて行った。

『桃』と言われたその子は、あたしの声を不思議そうな顔で見送るだけだった。

職員室を抜け、教室の方に走る。

しかし、墓真はしつこいわよ。どこまでも追いかけてくる。

二手に分かれた夜耶が、少し気がかりだけどあたしは走るしかない。バラバラでも、真っ直ぐあたしを追いかけて来るとはやるわね、墓真。

だけど、あたしは『霊体電話』を守る必要があった。

目の前の階段を駆け上がり、右と左の道が見える。

背後から迫る、墓真。あたしは、迷っている暇はない。

「よし、右」

即決したあたしは、その決断が失敗だったことを間もなく知る。

走って向かった廊下の一本道、二階を進んでいく。

後ろの墓真は、相変わらずついてくる。思った以上にタフな墓真、本当はあいつ体育教師なんじゃないのって思えてしまう。

「あつ、まずいわね」

教室をぬけた廊下を走るあたしは、曲がり角をまがった通路で見かけたのが開いているはずのシャッター。だけどそれが、無情にも閉まっていた。

まごつくあたしの後ろから、あいつが迫ってくるし。^{墓真}

今度は、あの手は使えない。

アイツに捕まったら、間違いなく身体検査でブレザーのポケットの中にある『霊体電話』は没収される。

唇をかみしめて、周囲を見回すあたしは隠れる場所を探す。

二階の窓とシャッターと壁に囲まれたその通路で、隠れる場所なんかない。

でも、あたしは窓を見てある行動に出た。

それからほどなくして、やってきた墓真教師。

息を絶え絶えに呼吸が乱れている様は、なんかストーカーね。

よれよれのジャージを着た中年男は、すぐさまあたしの方を睨んでいた。

「ほ、鳳凰院 奈々つ、なぜ、そこまで逃げるのだ？ ハアハア……」
手を震わせて、あたしの方に向かってくる。

「えっと、ね……それは、その……」

「じゃあ、早速だが身体検査を……」

黒く眼鏡が光った、墓真。めちゃくちゃ怪しいんですけど。

眼鏡越しに見せる、邪悪なオーラはあたしも、さすがにひいちゃうわよ。

そのまま、あたしは墓真の毒牙にかかっていた。

それから、二分少々。

「むう、無いな」

ポケットというポケットを、くまなく探した墓真。
なんだか、悔しそうな顔を見せた墓真。

あたしは、勝ち誇ったような顔を逆に見せていた。
腰に手を当てて、勝利宣言を見せていた。

「どう、これであたしのことが正しいってこと、分かったでしょ。
この変態教師！」

指をさし、愕然とする墓真に言い放った。

「な、なにを……教師に向かって……」

「大体、女の子を校舎内追いかけて回して、変態以外の何ものでもないわよ」

腕組みして、墓真は悔しそうな顔を見せていた。

握りしめた拳は、敗者の姿。その後ろ姿を、窓から漏れる夕日が赤く照らす。

「じゃあ、今度からそんな疑いを……」

「そっちこそ、へんな疑いをかけないでよ。全く失礼しちゃうわ！」
負け惜しみを言いながら、墓真はあたしからすごとく去っていく。
あたしは、そんな墓真の後姿を仁王立ちで見送った。

そして、墓真がいなくなっしてしばらく、あたしは空いていた近くの窓を閉めた。

それからほどなくして、出てきたのが夜耶。

墓真の様子を見計らって、夜耶は心配そうな顔を見せていた。

「夜耶、サンキュ」

あたしは、手を振って夜耶を出迎えた。

「菜々ちゃん、はい」

そういつて、夜耶はあたしの二つの携帯電話を渡してきた。

一つは、赤いデコ携帯。

もう一つは人参のストラップの携帯電話、通称『霊体電話』。

「それにしても、無茶するね。いきなり飛んできて、ビックリ」

「何言っているの、あれをしないと結局、没収なんだからしょうがないじゃない」

あたしは、そういいながら携帯電話と『霊体電話』を受け取った。

実は、二階のここから窓の下は、中庭になっているわ。

窓の下を見たときに、あたしは夜耶の姿を見かけて、手を振って思いついたの。

だから、窓の下にいる夜耶に携帯を投げ渡したのよ。

「まさか、投げて来るとは」

「あたしは、腕力には自信があるわ。」

こんなところで、役に立つとは思わなかったけどね」

我ながら正確無比なコントロールで、驚いてしまう。

「物理的に言って、放射線状に重力加速度と、重量を掛け合わせて……」

「ナイスキャッチ、ブレザー」

夜耶は、自分のブレザーを脱いで広げて、あたしの投げた二つの携帯電話を受け止めていた。

「ちよっと、傷ついちゃいましたよ」

夜耶は、口を尖らせていうが、あたしは苦笑いでごまかした。

「菜々ちゃん、ごめんね」

夜耶は、今度は申し訳なさそうに謝ってくる。

「うん、夜耶。あたし、目をつけられるの、慣れているから」

あたしは、夜耶に逆に笑顔を見せてあげた。

「そうだね、菜々ちゃんは宿題よく忘れるし、遅刻は多いし、モノは壊すからね」

「なに、夜耶いったな」

あたしは、逃げようとする夜耶の手をすぐさまつかんだ。

いたずらっぽく笑う夜耶に対し、あたしは返してもらった赤い携帯電話の画面を見せた。夜耶はあたしの携帯を見るなり、顔を赤くした。

「そんなこと言っただったら、あたしの携帯の中に入っている夜耶の恥ずかしい小学時代の作文、ブログに載せるわよ」

「えっ、あわっ、ダメっ！」

恥ずかしさで顔が赤くなった夜耶は、あたしの携帯電話に手を伸ばしたが、取れなかった。すぐさま、謝るしぐさを見せた夜耶。

「ご、ごめん。それだけは許して、菜々ちゃん」

「まあ、いいわ。それより、あの墓真という変態堅物教師は、本当に厄介なんだから。今度から、ちゃんと気を付けてね、夜耶」
どれほど、携帯没収をされそうになったか。

携帯なら、まだしも『霊体電話』を取り上げられると、本当にまずいんだから。

「じゃあ、行きましょ。まだ、あの子は魂体のままだからあたしの言葉に、夜耶は静かに頷いたのだった。

そのまま廊下を歩き、社会科準備室に向かうことにした。

人気もなく、誰もいない廊下。

あの一悶着の後、夕日が傾いてだいぶ周りは暗い。

あたしと夜耶は、それぞれ『霊体電話』の電源を切って、隠しながら社会科準備室の渡り廊下を歩いていった。

少し遠くの音楽室から、吹奏学部の練習の音だけが聞こえてきた。あたしは、あの時からずっと考えながら廊下を歩いていた。

「菜々ちゃん、今回もお願いしていい？鎮魂」

「うーん、いいけどあたしより夜耶が、一人でやった方がいいんじゃない？」

あたしの言葉に、なんか顔色が曇った夜耶。

「私だけじゃ、うまく行かない気がする。ほら、私は幽霊弱いから」「本当に？」

最近見せる、夜耶の弱気があたしは気になっていたの。

「なんかね、私……いいのかなって思うの」

「弱さを見せないで、夜耶はそこがダメなんだから！

時に強く、そして熱くよっ！大丈夫、いい『尼御前』になるわ、夜耶は！」

あたしは、元気に励ました。

夜耶の不安は、分かる。

今までも、ずっと二人で行動してきたし、それが当たり前だから。もうすぐやってくる『戒壇の日』。

この日を過ぎれば、夜耶はあたしと離れて父親と行動するようになる。

それは高校を卒業した後の進路が、はつきり決まる日。

高二にして、あたしと夜耶の進路が決まることは、大事な事。

何よりも、夜耶にはやる気があった。ずっとなりたいて、『尼御前』に想いがあった。

その想いを、あたしはずっと同じ部屋で暮らす双子の妹に聞いていた。

「菜々ちゃんも、お願い」

と来る途中に、夜耶にお願いされてしまった。

双子のかわいい妹に言われてしまったのは、あたしも断れるわけ、ないじゃない。

そんなあたしたちの目の前に、特殊教室の廊下が広がっていた。

間もなくたどり着いた、社会科準備室。

ここに来ると、隣の音楽室から聞こえる吹奏学部の練習の音がより大きく聞こえてきた。なんだか、その演奏が、あたしたちを応援しているようにも聞こえる。

「じゃあ、夜耶、見てきて。あたしだと墓真に……」

「おそらく気配が、ないです」

夜耶は、携帯画面の時計をちらりと見て真っ直ぐに社会科準備室のドアに近づいた。

すぐさま、夜耶はあたしに手招きをした。

「時間的に職員会議に、行ったのでしよう。取り込まれても、いいようです」

夜耶が、的確なことを言うとなんだか納得ができた。

あたしは、夜耶と一緒に誰もいない社会科準備室の中を歩く。さすがに、電気はつけられない。

（もう戻ってこなくていいわよ）などと心の中で、悪態をついてみたり。

あたしと夜耶は、『霊体電話』を持って暗い中を歩く。

完全に日は落ちていないので、歩けないほど真っ暗でもないけど。

携帯の明かりを頼りに、背後を気にしながら目的の魂体のいる土器に近づく。

「なんか、泥棒みたいですわね」

「泥棒じゃないわ、幽霊っていうものは、本来夜に出るもんだしね。そつえば、夜耶は昔っから幽霊苦手だったわね。」

おねしょとかして、子供の時は大変だったわね」

「菜々ちゃん、今はもう得意です！」

幽霊が得意なものも、考えものね。まあ、魂体も同じか。でも、ムキになっている夜耶がかわいかったりもする。

中を覗いて確認して、細心の注意を払う。

人がいないことを確認すると、あたしと夜耶は土器の方を見ていた。

土器の入っている棚には、あの少女の魂体が土器の中に丸く収まっているようにも見えた。霊的反応が、しっかり感じ取れる。

墓真のいない、暗い社会科準備室に入る。やっぱり、ブルブル震えていた『霊体電話』。

そんな夜耶は、あたしの手を不意に握ってきた。

「こういう今が、私は好きなんです」

「分かっているけど、夜耶。そうね、今しかできないから」

あたしは、この言葉が好き。

「今しかできない事」夜耶と、あたし、二人で『鎮魂少女』をすることは今しかできない。暗闇で握った手を見ながら、あたしは前を向いた。

そんなあたしたちが、問題の土器の場所にたどり着く。

あたしたちの存在に気づいたのか、人間に反応したのか

その瞬間、土器からさっきのポニーテール魂体の女の子が姿を現した。

「うつつ、なんかいるよお」

あたしは、『霊体電話』に耳を当てた。幼い感じの霊体の女の子は、ワンピースの姿で本当に可愛い、健気な格好。

「夜耶、あたしが聞くから、外を見張ってね」

あたしの言葉に、夜耶はすぐに従ってくれた。

こういうところは、双子の連携だね。夜耶はあたしに背を向けて、少し離れて社会科準備室の入口ドアのあたりに視線を送る。

もちろん、『霊体電話』を持って。

「あたしは、自分で死んだんだ」

喋る魂体、あたしはじつと彼女に頷いていた。

時間との闘い、しかし急ぐことはできない。

墓真が戻ってきたら打ち切り、戻ってくるかはわからないけど。

「あたしは、ずっと許せなかった。

なんでなの！両親も、兄と姉も優秀なのに三兄妹のあたしだけ、劣等生なのは。

家のみんな一流エリートコースを出ていて、あたしだけできないのは」

携帯から聞こえる声に、不満をぶつけていた。

直接しゃべることはないけど、不満を見せた表情だけで、悔しさが分かった。

拳を握ったけど、あたしのほうをじっと見ていた。

「あたしは私立小学校に入って、私立中学に入って、都内の有名進学高校に通う。

そして、みんなと同じ一流大学に入って、一流企業に就いて、一流の会社員になる。

そのためにいろんな人が、あたしにアドバイスをしてくれたの。

塾と、家庭教師もついて、両親も勉強を見てくれた。みんなが協力してくれた」

悔しさと高いプライドを垣間見える、しゃべり方。

「エリートコースに乗るための計画表、その指示通りにやって、受けた中学入試試験、でも、あたしは落ちたんだ、失敗したんだ。そこからだよ、あたしはエリートコースを外れて、脱落したのは」
魂体の女の子は、落胆の表情に変わる。
それは、傷ついた心を視覚的に示していた。

「エリートコースを外れたあたしは、優秀な兄や姉たち、両親からも見向きも、相手もされずに、たちまち孤立した。

食事も、一緒にとることは無くなったし、

公立の中学の行事でも、家族で仲間外れにされていた。

私は辛くて、悲しかった。

そして、両親について言われたよ。あたしは、『お前は意味がないと』

だから……」

「そっか……」

なんか、悲しい過去。あたしは、彼女の想いをずっと聞いていた。
おそらく後ろの夜耶も、同じ話を聞いていることだろう。

「この世は、一度失敗したら二度立ち直れない。

だったらあたしは、どうすれば成功したの？分らない。

正しく指示通りに動いて、勉強したのに、才能が無かっただけなの？」

彼女の質問に、あたしは考えていた。

彼女は、迷っていた。それがあたしにもわかった。

現世でのしがらみ、迷いを解けば、彼女はきっと立ち直れるはず。
だから、あたしも悩んでゆっくり彼女の求める答えを絞り出す。そんなとき、

「そっだよ。でもエリートだけが、世の中じゃないと思う」
その声は、夜耶。あたしは、ドアの方の夜耶に視線を移すと、表情

は暗くてうかがえないけどこっちを向いていた。

「嘘だ！だって、あたしは脱落して死んだんだ。

じゃあ、才能があればよかったってことね！才能が無ければ、死ぬしかないのね！」

まずい、あの子のプライドではあの言葉だと、聞き入れてもらえないわ。

すると魂体の女の子は、社会科準備室の窓の方へと飛んでいく。

夜耶は、あたしの方に駆け寄ってきた。いや、あたしとすれ違う時に、

「なんで、分かってもらえないの？私は、何がいけないの？」

「夜耶……」

夜耶は、明らかに落ち込んでいて焦っていた。

そのまま、魂体の女の子を追いかけていく。

あたしは、それ以上追いかけるのは無理だと悟った。

「待ちなさい！話の結論は、まだついていないわ」

「あなたたちとは、話すことはないわ。

みんな、あたしの苦労が理解できないから」

ポニーテールをなびかせて、女の子は窓から飛び出していった。窓に駆け寄りあたしは、魂体の女の子の行方を確認するが、夕日が沈んだあの子を探すことは難しかった。

それは、あたしたちが逃がしてしまった魂体。

「菜々ちゃん、ごめん」

暗い顔で、夜耶は深いため息をついた。後ろからあたしが、声をかけた。

「夜耶、大丈夫？」

窓を眺めた夜耶は、がっかりしていた。

その夜耶に、あたしは頭を撫でてあげた。

「うん、あの子は『鬼火』になっちゃうのかな？」

「おそらくね、でもあたしたち『鎮魂少女』の最後の目的ができたわ」

あたしは、それでも前を向いていた。

心配している夜耶に、笑顔を見せたあたし。

夜耶は、なんだか泣き出しそうな顔であたしを見ていた。

「あの魂体を、『戒壇の日』までに、なんとか探しましょ。絶対に、二人で」

あたしは、右手に持っていた『霊体電話』を握り締めて心に誓った。夜耶もまた、あたしに同意してくれた。『霊体電話』を、持って構えていた。

あたしと夜耶は、薄暗い社会科準備室で『霊体電話』を交えたのだった。

それは、もうすぐに迫った『戒壇の日』までに解決するあたしの最後の仕事と考えていた。

そう思えると、今まで楽しくなかった『鎮魂少女』が、ちよつと楽しく思えた。

朝の家は、いつもあわただしい。

あたしは、いつも通り自分の家の大きな和室で、ご飯を食べていた。通学に行く前の家の、一風景。あたしの家は、お寺。

今日の朝食メニューは、ご飯とお味噌汁と卵焼き、定番料理。

膳に入れられたご飯を、お行儀よく食べていたけど、ニンジン入りの混ぜご飯のせいで、あたしのテンションは下がっていた。当然のことながら、ニンジン箸で避ける。

和室で正座してご飯を食べる、あたしと夜耶。

上座に父親がいて、膳にもられたご飯をあたしは食べていた。

母親は、すぐに庭の掃除に行っていた。

お寺の隣の一軒家、そこであたしたちは暮らしているの。

紫の袈裟を着た、父の格好を見れば一目瞭然よ。

相変わらず、笑顔でご飯を食べていた。

「今日は、午前で終わりだっけ？」

「うん、部活のインターハイがあるから、今日は早いみたいね」
夜耶も、ご飯をきれいな姿勢で食べていた。

制服を着ていたあたしのそばには、右の方からじーっと視線を感じた。

「な、なによ、あげないわよ！」

あたしの隣で座っているのが、同じく体より大きめの制服を着た小さな女の子。

ショートカットで、童顔。見た目は小学生っぽいけど、あれでも高校一年生よ。

指をくわえながら、あたしの膳にある卵焼きを野良猫のように見ていた。

「えゝ、かわいい妹が欲しがっているよ、へへへっ」
無邪気そうに笑顔で、あたしを見ていた。

彼女の名は、鳳凰院 桃。一個下のあたしと夜耶の妹。
三姉妹の、三女ってことになるわね。

既に自分の前の膳のご飯を食べ終えた小さな妹は、かわいいオーラを出してくる。

「だゝめ、あげない。それに『かわいい』って、自分で言わない」
「えゝ、かわいいもん」

すねた小さな妹は、ぶりっ子をするけどあたしは無視していた。

桃の相手に飽きたあたしは、不機嫌な顔でお皿の卵焼きに箸を伸ばしてきた。

しかし、あたしが皿をどかして桃の箸を回避した。

夜耶は、目を潤ませてあたしに何かを訴えかけてくる。

かわいくぶりっこ桃は、ふてくされた顔を見せた。

「うゝ、菜々はケチだね。夜耶お姉ちゃんは？」

「はい、桃ちゃん」

女神のような優しくそうな顔で、夜耶は桃に卵焼きを箸でプレゼントした。

桃は、「わゝい」と子供の様に無邪気に喜んでいた。

横目でいつも見ていたあたしは、夜耶に対して、

「夜耶、ダメよ。桃を甘やかしちゃ！」

あたしの言葉に、夜耶はちよつと落ち込んだ顔を見せていた。

「うん。でも、なんか可哀そうだし、ね」

「夜耶は優しい、夜耶はいい子。夜耶、だゝい好き」

桃も、卵焼きを貰って満足そうな顔を見せていた。抱きついた桃を見ると、なんだか悔しくなってる。

「ああつ、ずるいつ。夜耶は、あたしだけのものだから」

「えゝ、そんなことない。夜耶お姉ちゃんは、桃のものだもん」

あたしと桃に挟まれて、夜耶は困った顔を浮かべていた。

「なにをっ！夜耶はあたしのものよ」

「べーだ、ケチケチ菜々姉」

舌を出した桃に、馬鹿にされて言い合うあたし。

そのまま、あたしは怒った顔で一つ下の妹に年甲斐もなく絡んでいく。

あたしと桃に挟まれて、夜耶の顔は少し落ち込んでいる顔を見せていた。

そんな光景を、対面で眺めるのが、

「夜耶は、モテモテだな、うん」

エロ坊主？の父親は満足そうな顔を浮かべていた。

混ぜご飯を食べながら、のんきにあたしたちの光景を見ていた。

あたしは、その声に反応して父親の方を見る。

「エロ坊主、あの夜の事、ママにバラすわよ」

あたしは、逆に不機嫌な顔でそのことを言つと、困った表情の父親は苦笑い。

「あれゝ、そんなことあったかな」

「じゃあ、ばらしてもいいのね」

流し目で見ると、父親はたちまち噴き出す汗を、ごまかしながら拭いていた。

あたしは、ご飯を食べながら普段の雰囲気を楽しんでいた。

あたしは不意にちらりと和室に、飾られたカレンダーを見ていた。
一週間後の週末には丸が書いてあった。

その日は、『戒壇の日』があるの。

『戒壇の日』で夜耶との鎮魂は、今の関係は、終わってしまふ。

夜耶は『尼御前』に、あたしは普通の生活に戻るから。

その前にも、何とかあの逃した魂体の女の子を鎮めないといけない。
あまり時間がない、今度は失敗したくない。だから、前を向いて父
親を見る。

「そつえば、父さん」

「なんだ、菜々？もしかして、また好きな人の相談じゃないのか」

「ち、違いわよ！大体、あんだのせいでしょ」

坊主頭の父は、静かに湯飲みを口に運ぶ。

クスクスと笑う夜耶に、あたしはなんだかムキになっていた。

桃も、夜耶から離れてあたしを指さして、

「えへへっ、菜々姉は、もういないんだ」

明らかに勝ち組のような言い方で、桃の挑発。

あたしは、ふてくされた顔で逆に言い放つ。

「桃っ、あんたはどうせ、山喜君でしょ！」

「うん、龍之介。幼なじみだよ」

山喜 龍之介、桃と同じ一年生。桃と違って体も大きく、スポーツ
マン。

確か、中学はバスケット部で都大会にも出ていたらしいわ。

「山喜君、今日もインターハイで出るんだよ。桃も応援する、がんばれ」

桃は、なぜか箸を持った両手を、バタバタ振っていた、危ないって。

「桃ちゃんは、本当に山喜君が好きなのね」

夜耶が言うと、桃は腰に手を当てて自信たっぷりに言い放つ。

「だ〜い好き、世界一、宇宙一、町内一好き」

なんか、最後の規模小さいわね。

でもいつも山喜君のことで、笑顔でちゃんと言える桃が、少し羨ましかった。

あたしには、そんな人はいない。だからこそ、あたしはそんな存在になろうと思えた。

「でも、山喜君ってかなり大人びた子でしょ。背も高いし。

結構、女子とかに人気あるんじゃないの？」

「うん、だから桃もいっぱい頑張るの」

「何を」と突っ込みを入れようとしたが、桃の目はなぜか燃えていた。

左手をぐっと握りしめて、いつになく真剣な顔を見せていた。

「女の子は、誰でもかわいくになれる権利がありますからね。ね、菜々ちゃん」

「う、うん、そうね……」

いつの間にか、食べ終えた夜耶は湯飲みをすすりながら、にこやかな顔を見せていた。

あたしは、困惑気味に苦笑い。

そんなときにあたしの父親が、想像もできない言葉を口にした。

「菜々、夜耶、このまえ逃げられたんだってな、魂体に」

父親の言葉に、あたしと夜耶は苦い顔を見せた。

夜耶は、持っていた湯飲みを静かに置く。

いきなり、楽しかった食事風景が、父親の声で一変した。

父親の言葉に、少し間を開けてあたしは顔を上げた。

「たまたまよ、まだ見つかつていないけど」

「ごめんなさい……私たち」

夜耶は、なんだか泣きそうな顔を見せていた。

変な空気になって父親は、袈裟の袖から何か名刺を取り出した。

ピンク色の名刺は、明らかに一般のものではないわ。

「それより、風俗嬢から聞いたんだが……」

「風俗はいいの」

すると、あたしの隣にいた桃は、目を大きくしてあたしを見ていた。

「ねえねえ、フーズクってなに？」

「子供に関係ない、大人の話よ。お子ちゃま桃には、関係ないわ」

「じゃあいい、夜耶に聞く。夜耶、優しいし」

すると、すかさずあたしの膳にある最後の卵焼きを、強奪して夜耶のところにすり寄った。

「フーズク」「フーズク」と卑猥なことだと知らない実年齢一つだ

け下のお子ちゃま桃は、夜耶のところで聞いていた。夜耶は困った顔を見せていた。

「えー、えと……」

苦笑いするしかないわね、ちゃんと説明できないみたい。

まあ、あたしも詳しい説明はできないけどね。

父親も、食事を終えて湯飲みを飲みながらあたしたちを見ていた。

「そんなお前たちに、俺が、鎮魂のヒントを教えてやろう。

菜々、夜耶、『聞き上手の三条件』を知っているか？」

「『聞き上手の三条件』、なにそれ？てか、風俗の受け売りでしょ」
「無論だ。でも、それがいいんだ」

なぜか、否定された父親にあたしはあきれ気味。
でも、前にいる夜耶は違っていた。

「教えてくれますか？私は、『聞き上手の三条件』」

真剣で、真面目な夜耶の言葉に父親は、

「それはな、教えてやろう」などと咳払いして、勿体つけていた。
すぐさま、あたしはにらみを利かせた。

「一つは、『相手に共感する』ことだ。

話す相手には、伝えたい内容が必ずある。

それは全ての文章ではなく、相手側の想いや感情の変化など、ごく
一部のものだ。

話の内容をよく考え、吟味して相手の意図を組み事が大事なんだ」

「『相手に共感する』？」

あたしは、その言葉を心に刻んだ。

夜耶も、膝に抱えた桃の頭を撫でているものの、しっかり父親に顔を向けていた。

「まあ、難しいことではない。

分かりやすいところで、入試の面接を思い出してほしい。

面接官が、「あなたの趣味は、なんですか？」と聞いてきた。

どういう意味があるか、菜々はわかるか？」

「えと、そのままでしょ。面接官は、私を知りたいってこと？」

「そうだな、ここは素直に答えることが大事なんだ。

面接官は、お前を書類上でしか知らない。だから聞く。

学校を受けるのに、趣味は関係ないかもしれない。

でも、お前という人物を知らないから、情報を得るための手段だ」
「情報を得る？」

「そう、人は、初めての人間と話す時はその人となりを知りたいものだ。

だから受験生は、逆に面接で自分をアピールする。

ごく当たり前で、自然なこと。

どんな人物で、どんなことが好きで、どんなことが嫌いかを。

だから、自分を知ってもらうことが大事なんだ」

妙に力説する父親に、あたしと夜耶はしっかり聞き入っていた。

夜耶に抱かれた桃は、逆につまんなそうな顔で夜耶から離れて少し離れたところで、あたしたちを見ていた。

『鎮魂少女』ではない桃には、関係のない話だと思ったから。

それを察知してか、父親が、

「桃、お前にも関係のある話だ」

と声をかけていた。でも、ふてくされた顔で桃は父親を見ていた。

「桃は、末っ子だから……」

「関係ある。桃だって、風俗嬢^{ソープ}としていつかデビューさせて……」

「だから風俗は、関係ないでしょ！」

さらりという父親の野心を、あたしは袈裟の首元をつかんで打ち砕く。

「さっさと話さないよ、このエロ坊主！」

腕つぶしの強いあたしは、父親の首元を閉めると、夜耶が

「パパ、死んじゃう」

青白い顔の夜耶が、あたしを止めた。

ぎりぎりと、理不尽に強い握力で占めたあたしに、父親は本当に仏様になるような安らかな顔を見せていた。

「わ、わかったわよ……」

あたしが手を放すと、父親の顔色が肌色に徐々に戻っていった。

父親が、ゆつくり戻って袈裟の襟を正した。

何度も咳払いして、呼吸を正してようやく正常に戻ったエロ坊主、いやあたしの父親。

でも、あたしは顔を強張らせていた。

「全く、菜々は……」

「うるさいわよ、あんた」

あたしの悪態に、やれやれと父親はため息をついた。

——中一の時、当時好きだった人とあたしは、町に行っていたの。四回誘って、ようやくデートにこぎつけた。あたしの、初デート。映画を見るわけでもなく、ぶらぶら町を歩くあたしたち。

そんなデートの中で、父親が偶然風俗店から出てきたの。

あたしは、もちろん無視しようとしたけど、容赦なく父親があたしに声をかけてきた。父親の声で、あたしのデートは一気に冷めてしまったわ。

結果、別れることになっちゃって——

それ以来、風俗と父親が大嫌いになったの。

「で、もう終わりなの？」

怒った顔で、あたしはご飯を口に運ぶ。

「まあ、まだ続きがある。

趣味を聞き、家族構成や、世間話をしながら、次に聞く質問と言え
ばこれだ」

「で、勿体^{もったい}つけないでよ」

「『あなたの、志望理由はなんですか？』だったら？」

父親には、目力があつた。こういう時は、お茶らけた話をしない。
重い口調で言ってくるあたしは、言葉を考えてた。

「志望理由ねえ。魂体がいっぱいいるから、じゃなくて近いから、とか。」

この学校も、そうやって選んだわけだし」

自分の着ているブレザーを、ちらりと見ながらあたしは答えた。

「私も、そうです」

夜耶も、真面目に答えていた。

「まあ、それだとダメだけど、意図としては間違っていない。

この質問は、菜々、お前が学校に対してどう思っているかを、問っているんだ。

これが相手の意図を組んで、話すということだ」

父親の言葉を、少し理解できた。

要は、話の内容を考えて話してきた人の知りたい答えを、出すってことね。

「じゃあ、次の『聞き上手の三条件』は？」

あたしが、次の話を聞こうとしたときに、

「菜々、そんなことより、そろそろ時間じゃないのか？」

父親が、あたしに時計を見るよう促してきた。

時間は、もう七時半。通学の時間を、迎えていた。

「ご飯食べていないの、菜々だけだね、えへへっ」

「えっ、あつ、しまった！」

あたしの前にある膳には、ご飯がちゃんと残っていた。

周りを見たら、あたし以外はちゃんとみんな食べ終えていたし。

背の低い桃は、夜耶から離れて、やっぱりあたしの残ったご飯を見ていた。

だけど、結局時間にまくしたてられて、残り二つの話はそこでは聞けなかった。

土曜日の午後の学校は体育館と、グラウンドと武道館が賑わっていた。

今日はインターハイ、都内近隣の学校が集まっていたから。

午前中で、授業を終えて部活のない生徒は家に帰る時間。

インターハイの応援は自主参加だけど、ほとんどの生徒が残っていた。

でもあたしと夜耶には、関係がない。

取り逃がした女の子の魂体を、探さないといけない。

授業による拘束時間がないので、魂体探しを夜耶といつも通りに行っていた。

天敵の墓真は、おそらく武道館にいるはずね。

空手部の、顧問代理をしているはずだから。

『霊体電話』片手に、多くの違う制服の生徒が集まる学校内を散策する。

この学校には、七不思議があつたけど、全て解決したわ。

誰もいない音楽室でなり続けるピアノ、トイレの花子さん、美術部の顔が動く肖像画などなど。幽霊騒動の全てが、魂体と繋がっていた。

そして、あたしと夜耶の二人で全てを鎮魂したの。

まあ、あたしと夜耶にかかれたいしたことないわよ。

「いないね、トイレ」

女子トイレを見回した、あたしは反応のない『霊体電話』を片手に見ていた。

夜耶も、少しがっかりした顔を見せていた。

「いったいどこに行つたのかしら、あの魂体」

あたしと夜耶の目当ては、逃げた女の子の魂体。なんとしても探さない。

『戒壇の日』まで、もう一週間を切っている。

この日を過ぎてしまえば、あたしは鎮魂少女でなくなる。

『尼御前』に未練はないが、後悔をあたしは残したくなかった。

それにしても、人が多いわ。本当にお祭り騒ぎね。

葛芝高の生徒、それから他校の生徒。いろんな生徒が校内に入り乱れていた。

「うん、にしても今日のトイレは多いね。行列もできているし」
女子トイレの個室は、全て埋まっていた。

インターハイで増えた人、応援団の生徒たちとで賑やかな学校。

「こういうのも、いいじゃない。あとはそうね……」

廊下に戻ったあたしと夜耶は、そのまま渡り廊下を歩いていた。すると、廊下の奥からは、ひととき大きな歓声が聞こえてきた。

「ねえ、あっち体育館ね。何か部活、やっていたっけ？」

「体育館は、今の時間は男子バスケットだね」

学校から配られたインターハイの地図を、夜耶は見ていた。

「ちょっと見て行かない、夜耶」

「でも、魂体探しは……」

「大丈夫よ、少しだけ息抜き」

そっぴいなながら、お祭り好きのあたしは真面目な夜耶の手を強引に引っ張った。

夜耶は、困った顔を見せたけどあたしは、構わず連れて人ごみの集まる体育館へと侵入していた。

体育館は、これでもかっていうほどの人がコートの試合に集中していた。

もちろん、男子バスケの選手がコートの主役。

得点ボードには、あたしの葛芝高がよその高校と戦っていた。バスケはよくわからないけど、決勝と書かれていた。

点数は、七十六対七十五。

接戦みたいだけど、あたしの学校は一点リードを許していた。試合の時間だろうか、時間はあと十秒を切っていた。

「うわっ、都大会決勝だつて。夜耶、すごいね」

『都大会決勝』って書いてあったから、あたしは興奮していた。始めて見るけど、この体育館全体はすごい熱気に包まれていた。

「そうだね、菜々ちゃん」

「葛芝高ってバスケ、強かったんだね」

母校の意外な誇れるところを見つけて、あたしは感動した。

人ごみをかき分けて、前に出たあたし。夜耶も、体育館の中を見ていた。

あたしは、コートを見ていた。どうやら、赤いビブスが相手ね。

白のユニホームが、私たちの葛芝高。名前も、入っているし。

その白いユニホームが、相手陣内に攻め込んでいた。

体育館が、大きく揺れるような歓声。

「いけー」という声と、ブラスバンドの演奏が続く。

そんな大きな声と音楽の中で、あたしは冷静にコートの中の一人の選手を見ていた。

「あれって、山喜君じゃない？」

ボールを持ったのが、サーファアの様に日に焼けて背の高い男子。そう、この子が山喜 龍之介君。桃の幼なじみ、凜々しい男子。あたしも、夜耶も唯一知っている一つ年下の近所の男の子。

彼が白いユニホームを着て、険しい顔でボールを手に弾ませていた。

ボールを奪いうため、赤いユニホームの男子が手を伸ばしてくる。山喜君がいるってことは、おそらく桃も、この体育館のどこかにいるわ。

って、二階の踊り場で先頭に立って旗を振っているし。

「がんばれ、葛芝高！」

小さな体で、懸命に降っている姿は、旗に振られているようにも見えた。

なるほどこれね、桃が頑張るっていうのは。

再びコート内に、視線をうつす。

相手選手の手を山喜君がかいくぐって、シュート体勢になった。

山喜君は、真っ直ぐゴールを見ていた。

奥にいた相手選手をかわすことなく、白い円の中に入ってからシュートを打つ。

シュートと同時に、なったブザー音。

山喜君のシュートを、相手選手が叩こうと手を伸ばすが届かない。ボールはゴールに向かって、きれいな放物線を描いて飛んでいく。そこにいた誰もが、ボールの軌道を目で追っていた。

「入れっ！」

あたしと夜耶も、手を重ねて祈った。

ボールは、バスケットゴールに向けて飛んでいく。

そして、ゴールの金属の淵に当たり、鈍い音を立ててはじかれた。

それと同時に漏れる会場のため息、あたしもため息をしてがつくりした。

何よりシュートを打った山喜君は、その場に愕然と両手について倒れこんでしまった。

顔面蒼白で、涙があふれ、完全に腰が砕けていた。

勝負は、時として残酷よ。

隣では、喜ぶ赤いユニホームの選手たち。

白のユニホームの選手たちは山喜君に近づいて、涙するものもいた。肩をたたいた、選手たちはショックで立てない山喜君を両脇に抱えていた。

彼は、顔をぐちゃぐちゃにして泣いていたからだ。

「うつつ……… ずいません」

大きな震えた声で、山喜君は謝っていた。

そういえば、山喜君は涙もろかったわね。

そこに、会場全体から惜しげもない拍手が送られた。

「なんかいいわね、バスケ」

妙に一体感のあった体育館の感動に、あたしもやつぱり泣きそうになっただけ。

ようやく立ち上がった山喜君を抱え、選手たちが礼をしていた。

礼の後、体育館の中は拍手が鳴りやまない。あたしも、その一人。

あれ、もしかして泣いていない？おかしいなあ。

すると、隣の夜耶がハンカチをあたしに渡してきた。

「菜々ちゃん、山喜君のこと好きになった？」

夜耶が、拍手しながらあたしの方にやはり少し泣きそうな顔を見せ
てきた。

あたしは、素直に夜耶のハンカチを受け取って目頭を押さえた。

「えっ、違うわ。そんなことしたら、桃に睨まれるじゃない」

「ふふっ、そうね」そんな夜耶の言葉とは対照的に聞こえた、ヒソ
ヒソ話。

後ろにいる女子だろうか、その言葉がよく聞こえた。

「あゝあ、これで最強世代の三年生が引退か」

「うん。ようやく今回は、優勝のチャンスが来たんだけどね」
そのヒソヒソ話が、なんだかあたしに引つかかっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9389u/>

鎮魂少女ナナ

2011年10月12日08時01分発行